

復活節第6主日

2011/5/29

聖ヨハネによる福音書第15章1～8節
於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」今日の福音書の一節です。イエスさまはパレスチナの人々が、日常、親しく目にする植物にたとえて、ご自分と弟子たちとの関係が、どのようなものであるかを教え、語られました。

古代のイスラエルにおいて、最も重要な産物は麦だったそうです。パンを作って主食としたからでしょう。それに続くのが、厳しい自然環境の中でも豊かな実を实らせるオリーブやぶどうでした。そしてざくろとかイチジクも聖書の中に登場します。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ。」イエスさまは麦にたとえて、ご自分の死の意味を語られました(ヨハネ12:4)。

創世記では、ノアが洪水の後に農夫となってぶどう畑を作り、ぶどう酒を飲んで酔っぱらって裸で寝てしまった物語があります(9:20)。

またモーセに率いられたイスラエルの人々が、約束の地カナンの様子を探るために偵察隊を遣わした時に、彼らは一房のぶどうを切り取って2人で担いで持ち帰りました。同時に、ざくろやイチジクも一緒に採り、その土地が豊かな地、まさに「乳と蜜の流れる所」であったことを報告しています(民数記13:20)。

パウロは、ユダヤ人に代わって異邦人が救われるようになったことを、オリーブの木にたとえています。栽培された木であるユダヤ人が切り取られて、野生のオリーブである異邦人がそこに接ぎ木されたのだと言っています(ロマ11:7～)。

このように、聖書のメッセージは、当時のイスラエルの人であれば、誰もが良く知っている材料を題材として語られています。植物だけではなく、動物も沢山出てきますし、当時の人々が噂し合ったあった事件や、歴史上の故事も引用されて、分かりやすく具体的に展開されています。

ところで、今日のぶどうの木のたとえで言われているように、イエスさまがご自分のことを、「わたしは、〇〇である」という言い方が、ヨハネ福音書には7つ出てきます。それを

拾ってみますと、①「わたしは命のパンである」(6:35他) ②「わたしは世の光である」(8:12) ③「わたしは羊の門である」(10:7) ④「わたしは良い羊飼いである」(10:11他) ⑤「わたしは復活であり命である」(11:25) ⑥「わたしは道であり、真理であり、命である」(14:6) ⑦「わたしはまことのぶどうの木である」(15:1)。イエスさまは、このように宣言して、ご自分がどのようなお方であるかを明らかにされました。

これらの殆どの箇所が、大齋節から復活節にかけて読まれますので、皆さんも記憶に留めておられることでしょう。イエスさまは、ご自分が何ものであるかを語っておられるのですが、どのような話の流れの中で、「わたしは、〇〇である」と語っているか、そこには2つの特徴があると指摘されています(『聖書を読む——ヨハネ福音書』)。

1つは、わたしたちとの関わりの中で言われているということです。つまり、わたしたち人間のことを、イエスさまが深い配慮をもってお考えくださっているのです。わたしたちのためを思って、このように言っておくださっているのです。思うだけではありません。そのイエスさまにわたしたちが従って行く時に、命が与えられ、わたしたちも光の中を歩むことができるようにしてくださるのです。

もう1つの特徴は、イエスさまのこれらの宣言の前後には、父なる神さまについて語られていることです。先週、読みました「わたしは道であり、真理であり、命である」という宣言の続きには、「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことはできない」とありました。イエスさまが道であるということは、父なる神さまのもとにわたしたちが至るための道だということです。イエスさまと父なる神さまの親密な関わり、交わりがそこにはあります。その関係の中へとわたしたちを招いてくださるのが、このイエスさまの宣言です。その交わりの中で生きる時に、わたしたちは命の道を進むことができるのです。

今日の「わたしはぶどうの木」というたとえにも、父なる神さまは農夫であると語られていますし、「あなたがたはその枝である」と言われています。そして、「わたしにつながっていなさい」と命じられています。この「つながる」と言う言葉が、今日の福音のキーワードです。「留まる」という意味です。

今日の箇所のお話のすぐ後には、「わたしの愛に留まりなさい」というイエスさまのみ言葉がありますが(15:9)、この「留まる」が「つながる」と同じ言葉です。ほかにも、「わたしの言葉に留まるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である」と言って、イエスさまとその弟子との関係は、イエスさまの言葉に留まることによって成り立つのだと言われていました(8:31)。イエスさまのみ言葉とは、愛の戒めのことです。「互いに愛し合いなさい」というご命令を生きる時、わたしたちはイエスさまの弟子として実を結ぶのです。

また、イエスさまと父なる神さまとの関係は、「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられる」と表現されていますが(14:14)、「おる」と訳されているのが、やはり「留まる」と同じ言葉です。深い結びつきによってつながっており、切り離すことができない交わりの中に留まり続ける、一緒にいる、それが父なる神さまと独り子イエスさまとの関係です。同じように、わたしたちもぶどうの木であるイエスさまに、枝としてつながっていなさい、と命じられています。そうすることで豊かな実を結ぶことができるのです。

ぶどうの木と枝の関係は、どのようなものでしょうか。このことを考える時に、ぶどうの幹と枝とは言われていないことに注意したいと思います。わたしたちが枝にたとえられていますので、イエスさまは幹なんだと理解しがちです。でもイエスさまは、ご自分を幹とは言われませんでした。あくまでもぶどうの木とおっしゃったのです。枝もぶどうの木の一部です。同じぶどうの木の命を生きているのです。別々の命を生きるのではありません(『ヨハネ福音書を読む』)。

幹と枝との関係であると理解するのであれば、そこには役割を分担するという考え方が入ってきます。機能的な働きが期待されるようになります。それぞれの持つ役割を果たすという点から、それぞれの部分を眺めることになります。そしてそればかりが強調されるようになると、役割を担えなくなった枝は不要なものとして切り捨てられて行くことになります。

会社の論理であれば、役に立たない人間は早く辞めてもらいたいということであるかもしれません。役に立つ人材を育成することが、職場に於ける研修であったり社員教育の

目的であったりするでしょう。仕事に必要な知識や技術を身につけて、業績を上げることに貢献してほしいからです。

しかし、ぶどうの枝は、そのように何かの役に立つか立たないかという観点から評価されるわけではありません。業績を上げたか成績が芳しくないか、それが問題とされるわけではありません。同じ命を生きている、イエスさまの命を分け与えられて、イエスさまの命そのものにあずかっているという、その一点のみによってつながっているのです。ほかには何もなくて良い。いやあってはならないのです。同じお恵みに生きている、それがぶどうの枝を枝たらしめているのです。

それでは、何故、「わたしにつながっているながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる」と書かれているのでしょうか。このみ言葉をどのように理解したら良いのでしょうか。

ある人は、「取り除く」という訳は誤りだと言いました。この原語には、元来、「持ち上げる」という意味があり、農夫が、垂れ下がって地をほうように伸びている枝をきれいに洗って持ち上げ、棚に結びつけるという動作を現していると言いました。そうすることによって、枝はまた元気よく育って行くのです。神さまは決して土の上に落ちた枝を見捨てたり切り捨てたりなさらないというのです(『ヴァインの祝福』)。聖書学的には、やや疑問があるとしても、捨てがたい解釈だと思います。

もう1つは、枝を取り除くのは豊かに実を結ぶように手入れをすることだ、刈り込むことだ、豊かに実を結ぶための神さまの剪定だと理解するのです。

ヘンリー・ナウエンは、次のように書いています。少し長いですが引用します。

「今日の福音書の言葉は、苦悩についての新しい展望を開いてくれました。刈り込みは、木がより多くの実を結ぶ助けになるというのです。たとえ私が実を結び、神の国のためにあることをなし、人々が私によってイエスをより深く知ることができたと感謝しても、わたしにはさらに多くの刈り込みが必要です。

多くの不必要な枝や小枝が、実をたくさん結ぶのを妨げています。それらは切り取らねばなりません。それには痛みが伴います。不必要かどうか自覚しているわけではないの

で、なおいっそう痛みを感じます。さらに、それは美しく、魅力的で、とても生き生きと見えることが多いのです。でも、切り捨てねばなりません。実を豊かに実らすために。

このことは私にとり、拒絶のつらさ、孤独な時期、心の闇と絶望感、人からの支援と愛情への飢餓は、神よりの刈り込みかもしれないと受け止める助けになります。人生での少しの実りを見て、私はあまりに早く満足してしまったかもしれません。『それなりに、あちこちで良いことをしたではないか。少しでもできたのだから感謝し、満足すべきだ』と。でも、もしかしてそれは偽りの慎み、あるいは霊的怠慢の一つかもしれません。神はさらなることに招いています。刈り込みをしたいのです、刈り込まれた木は見栄えがしません。しかし収穫の時には、多くの実を結びます。」そう言っています(『ナウエンと読む福音書』)。

自分の多少の働きに自己満足してしまう。それは自分自身に栄光を帰すことです。わたしたちが豊かに実を結ぶのは、それは父なる神さまが栄光をお受けになるためです。神さまが神さまとし崇められるようになるためです。

神さまは、わたしたちが自らを評価して自己満足に浸ろうとする時に、何らかの方法を持って、刈り込みをしようとされます。そして、より大きな神の栄光のために、わたしたちを用いようとなさるのです。わたしたちもそのことに目が開かれなければなりません。それは、苦痛を伴うかもしれませんが、その時こそ、神さまのわたしたちに対する期待とそれを実現させてくださる恵みが溢れているのだ、ということに気づきたいと思います。

今日は、ぶどうの枝を剪定する神さまの恵みに思いを深くしたいと思います。